

臨床教育学講座 2002 年度授業科目一覧

■臨床教育学基礎演習 I (皆藤章・矢野智司)

本演習は、教育の意味を多様な視点から理解するために必要な基礎的な知見と技法を育てることを目指しており、二人の教官がそれぞれテーマを定めて、リレー式に授業する。また、レポートの書き方、文献の読み方などの基礎も指導する。

皆藤：「人間とは何か」というテーマに取り組む基本姿勢を、童話・戯曲・漫画・詩・小説などさまざまな人間表現の素材を用いて、そこに含まれている生きる知に体験的に触れることをとおして身に着けることを試みる。受講生はさまざまな素材に触れて活性化するイメージを手がかりにして授業に主体的に参加することが必要となる。取り上げる素材については適宜指導する。

矢野：教育人間学の入門書としてルドルフ・ラサーンの『一般教育学概説』をテキストにして教育人間学的な見方を学ぶ。

■臨床教育学基礎演習 II (矢野智司・皆藤章)

本演習は、教育の意味を多様な視点から理解するために必要な基礎的な知見と技法を育てることを目指しており、また、レポートの書き方、文献の読み方などの基礎も指導する。

矢野：前期に引き続いて、教育人間学の入門書としてルドルフ・ラサーンの『一般教育学概説』をテキストにして教育人間学的な見方を学ぶ。

■臨床教育学講読演習 I (吉田敦彦：大阪女子大学助教授)

臨床教育学的主題を、ホリスティック教育のアプローチによって論じた英語テキストを講読する。

ホリスティック教育研究を代表するジョン・ミラー（トロント大学大学院 OISE 教授）編の最新刊、J. Miller and Y. Nakagawa ed., *Nurturing our Wholeness* (生の全体性を育む) : *Perspectives on Spirituality in Education*, Foundation for Educational Renewal, (2002 年 1 月刊行予定) をテキストとする。必要がある場合には、*Holistic Education*

Review 誌掲載の諸論文から相応しいものを随時選択して補足する。

■臨床教育学講読演習Ⅱ (吉田敦彦：大阪女子大学助教授)

臨床教育学的主題を、ホリスティック教育のアプローチによって論じた英語テキストを講読する。

ホリスティック教育研究を代表するジョン・ミラー (トロント大学大学院 OISE 教授) 編の最新刊、J. Miller and Y. Nakagawa ed., *Nurturing our Wholeness* (生の全体性を育む) : *Perspectives on Spirituality in Education*, Foundation for Educational Renewal, (2002年1月刊行予定) をテキストとする。必要がある場合には、*Holistic Education Review* 誌掲載の諸論文から相応しいものを随時選択して補足する。

■臨床教育学概論Ⅰ (皆藤章・皇紀夫)

「人間とは何か」を探求するアプローチの基本として、時系列に沿った人間のいとなみを取り上げて概説する。

■臨床教育学概論Ⅱ (皇紀夫・皆藤章)

- (1) 臨床教育学の成立と展開について、この10年間の歩みを紹介する。
- (2) 臨床教育学の学的な性格について述べ、その研究方法と研究分野について考察する。
- (3) 教育相談の「事例」に即して、学校教育のあり方、教師再教育の課題について述べる。

■身体教育学 (矢野智司)

「身体教育人間学」

教育は身体に働きかける。このとき、教育のタイプをシンプルに二つに分けて考えることができる。一つは社会的な技術を身体に植えつけることである。歩くことからノコギリを挽くこと、また挨拶といったマナーや授業を受けるときの姿勢といった学習の仕方もそうだ。そして従来の体育が目指していたものも、身体文化の伝達として、このタイプの教育だった。もう一つの教育のタイプは、共同体向けの身体技法を形成するのではなく、反対に、身体を宇宙へと開くことを目指すものである。音楽やダンスやスポーツはこのタイプの教育と結びついている。教育と身体との関係はとても奥深くそして興味深い。できれば病気やファッションといった身体論の諸相についても論じてみたい。

■臨床教育学専門ゼミナールⅠ（矢野智司・田中毎実）

クリストフ・ヴォルフ編『教育人間学入門』および関連する献を適時参照し、それらをもとに教育人間学的な見方について討議する。なお卒業論文の構想発表もこの時間におこなう。

■臨床教育学専門ゼミナールⅡ（皇紀夫・矢野智司・皆藤章）

人間がそのいとなみから表現してきたさまざまな素材をもとにして、そこに「私」という個がコミットすることをとおして創造的な「人間知」が産み出されていくプロセスを試みる。受講生は、みずから素材を見出し、みずからその素材にコミットし、みずからその素材にコミットしたプロセスを報告することになる。素材は、専門文献にかぎらず、文学作品、詩、漫画など多種にわたってよい。

なお、卒論指導も兼ねる。

■臨床教育学研究Ⅰ（皇紀夫・矢野智司・皆藤章）

臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を精力的に読む。また、博士論文に向けての指導を行う。

■臨床教育学研究Ⅱ（皇紀夫・矢野智司・皆藤章）

「臨床教育学研究Ⅰ」を引き継いで、臨床教育学と臨床教育人間学の基本的文献、古典的文献を精力的に読み、最新の知見の検討を行なう。また、博士論文に向けての指導を行う。

■臨床教育学特論Ⅰ（角野善宏：大阪市立大学大学院生活科学研究科助教授）

〈分裂病論 ―心理臨床の現場から―〉

精神分裂病に関して、心理臨床的観点から、できるかぎり多くの方向により、焦点をあて述べたい。

1. 分裂病の心的構造論

- ・分裂病コンプレックスの観点から
- ・分裂病者と転移・逆転移の観点から
- ・分裂病者による風景構成法の観点から

2. 分裂病の治療論

- ・薬物療法の心理臨床的意味

- 治療的枠構造の意味
- 家族の関わりの意味
- 絵画療法を通しての治療的意味
- 分裂病と身体化症状の関係

3. 実践と症例

- 風景構成法を通して
- 夢分析を通して
- 妄想を通して
- 精神症状の内的意味を通して

■臨床教育人間学特論Ⅱ (田中智志：東京学芸大学助教授)

社会学的かつ人間学的な教育論です。現代日本社会の構造的な特質を流体的な機能的分化とみなすとともに、そのなかで生きる子どもたちの経験を機能的な経験と存在的な経験の二重性ととらえていきます。社会の構造的な特質をとらえるために、ルーマン、バウマンの社会理論を用います。また、子どもの経験をとりえるために、ドゥルーズ、デリダの哲学思想を用います。授業は、前半と後半にわけます。前半は講義としますが、後半は前半の講義にたいする受講生のコメント・批判にもとづくディスカッションを行ないます。

■臨床教育学演習Ⅰ (皇紀夫・皆藤章)

皇：教育研究者の作り出した典型的な教育言説に注目してその語りの構造・様式・筋立てなどの分析をするとともに、さまざまなジャンルの人間に関する言説、特に仏教思想との対比において、言説間の類似性と差異性について検討する。

皆藤：人間に関するさまざまな領域の「語り」との対話を試み、それをとおして展開される世界を「語る」ことをとおして、「人間とは何か」というテーマをわれわれの間いとして引き受けることを試みる。素材は基本的に受講生が見出すことになる。

■臨床教育学演習Ⅱ (矢野智司・田中每実：京都大学高等教育教授システム開発センター教授)

後期は、教育人間学の古典的なテキストと教育人間学にたいする批判的テキストを、精神的に読み、教育人間学の今日での可能性について議論する。読むテキストについては、授業の最初の時間に指定する。

■学校臨床学演習（皇紀夫・皆藤章）

学校臨床教育学の方法：教育やカウンセリングあるいは学校や子どもや教師に関する最近の文献を読み討論し、日本の教育の病理的事象への理解を深めるとともに、病理的事象を意味づけている教育関係者や心理学者などの語りの文脈に注目していきたい。

また、学校で現に起きている「問題」や相談事例について現場からの話題提供を受けて、学校臨床教育学の可能性について共同調査研究したい。

受講希望者は、あらかじめ希望届けをだして、指示された文献についてレポートを提出すること（これらについては5月に提示する）。

■臨床教育実践学実習Ⅰ（皆藤章・大山泰宏）

基本的には、昨年度開講された「教育相談学実習」の内容を引き継いでいく。

心理教育相談に関わる実践的訓練において伝統的に行なわれてきたケーススタディを、心理療法をめぐる現代的展開を視野に入れながら基本に立ち戻って再検討していく。これはすなわち、「ケーススタディとは何か」というテーマを現代の心理療法の視角から照射する試みである。臨床心理学や臨床教育学の教育において、ケーススタディという訓練方法が開いている可能性もあれば、逆にそれによって閉ざされているものもあろう。したがって、ケーススタディがいかなる方法でどのような特徴をもっているかを、レフレクションすることは、この教育方法においてきわめて重要なこととなる。

具体的には、（1）ケーススタディによって伝達される事柄にはどのような特徴（長所と限界）があるのか、（2）この方法を最大限に有効化するにはどのようなことに留意すべきか、（3）なぜ、個別的なケーススタディによって一般的な訓練が可能になるのか、（4）ケーススタディにはどのような種類があるのか（ハーバード方式、インシデント・プロセス法、能動的学習法など）について学ぶこととなる。いずれも、単なる方法論ではなく、あくまでも臨床心理学や臨床教育学の実践に連結する、すなわちクライアントや子どもを理解するために重要となる具体的問いの設定と考察を重視する。

■臨床教育実践学実習Ⅱ

基本的には、昨年度開講された「教育相談学実習」の内容を引き継いでいく。

「臨床教育実践学実習Ⅰ」に引き継いで、とくに最新のメディア機器を用いて、心理療法的な実際場面のプロセス分析を試みる。たとえば、ビデオという映像メディアを用いた場合、

ケーススタディにはどのような可能性が出てくるのか、またどのような問題が生じてくるのかを、実際のロールプレイ事例の検討を通して考究していきたい。また、それらのメディアを使用したカンファレンスを実際に体験し、その方法論に関する検討を行う。

さらに、メディアは単なる記録や情報共有のための道具ではなく、それが独自に構成し切り取る世界がある。それを臨床家・教育者の「目」と比較することで、対人援助職の専門家の視点を描き出すことも本実習の目的の一つである。